

# 富山如大地

—第144号—

発行人  
幽溪 浩

発行所  
富山市総曲輪2丁目8-29  
真宗大谷派富山教務所  
編集  
富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799  
教区・別院ホームページ <http://toyamabetsuin.jp/>  
教務所アドレス [toyama@higashihonganji.or.jp](mailto:toyama@higashihonganji.or.jp)



## もくじ

- ・第11組同朋大会  
一樂 真氏  
2~22
- ・真宗合同布教大会  
23~26
- ・研修会報告  
27~28
- ・教区だより  
29~31
- ・お寺と紅葉……奈良・京都  
32

## 真宗合同布教大会（ライブ法話をするひのう姉妹）

いつも誰かのせいにして自分中心に生活している自分に気づいた今だからこそ、仏法に耳を傾けてみませんか。仏法を聞ける者になるには、仏法を大切にいただき生活されていた先人たちの道に出遇うことこそ肝心なことではないでしょうか。こそ真宗門徒としての聴聞の世界に気づかされた念佛の生活でしょう。私は、お参りに行つた時聴聞の世界を話すように心がけています。

仏教の七慢は、「慢」とは、他と比較しておごりたかぶること。「過慢」とは、自分と同等の人に対し自分が上だと思うこと。「慢過慢」とは、自分より優れた者に対して自分がもっと上だと思い誤ること。「増上慢」とは、悟りの域に達していないのに、すでにさとうていると自惚れること。「我慢」とは、自分に執着することから自負心が強く、自分本位のこと。「卑慢」とは、はるかに優れた者と比較し、自分は少ししか劣っていないと思うこと。「邪慢」とは、間違った行いをして正しいことをしたといいはること、と説かれています。全ておごりたかぶる煩惱を七種に分けたものです。煩惱により苦悩しているのが現実です。

近頃、お参りに行く家の方々から、「若い者と話をする機会も減り言葉数の少ない時代になり、たまに話しかけても耳を傾けてくれない」「話しかけても『うるさい』と言われ、目に映るのは好き放題して我慢することがなくなった」「私さえ我慢しどればいいがやちゃ」などと話されることが多くなりました。「我慢」は、仏教語で七慢の一つです。慢とは、思い上がりの心をいい、その心理状態を七つに分けたものを七慢と言います。我慢は、自分に執着することから起る慢心を意味し「高慢」「驕り」「自惚れ」などが同意語です。そこから転じて我慢は、「我を張る」「強情」などの意味で使われるようになります。我慢は、自分に見せまいと堪え忍ぶ姿に見えるたらに強情な態度は人に弱みを見せまいと堪え忍ぶ姿に見えるため、一般的に自分を押さえて耐える意味で使われています。

我慢

第四十二回 真宗大谷派 富山教区第十一組 同朋大会

期日 二〇一八年六月十日(日)  
会場 玉永寺(富山市水橋)

# 念佛の救い

大谷大学教授 一樂眞氏

二〇一八年六月十日、講師に一樂眞氏(大谷大学教授)を迎えて、第十一組同朋大会が玉永寺を会場に開催されました。本誌では、そのご法話を掲載させていただきます。

同朋大会という大事な会にお声をかけていただきました一樂と申します。日頃は京都の大谷大学で学生さんたちと一緒に親鸞聖人の教えに学んでいます。が、今ほどご紹介いただいたおり、石川県の小松のお寺をおあずかりしております。今日は「念佛の救い」というテーマを掲げさせていただきます。

今、三帰依ということで仏・法・僧の三宝に帰依するということをします。日頃は京都の大谷大学で読みました。仏というのはインドの言葉で「ブッダ」、目覚めた者という。それを省略して仏という。私たちとともに生きているつもりでも、本当のことを見えていいのではないかということがあるわけです。昨日も痛ましい事件がありました。新幹線の中でナタで

切りつけ、一人の人が亡くなつたということです。犯人は二十二歳の青年で、むしゃくしゃして誰でもよかつたと。腹が立つことはあるでしょうが、それで何で人を傷つけなければならないのか。まだわかりませんが、ああいう若者が出てきたということは自分の中だしさは何に向けていいかわからぬということです。その腹が立っている

かというふうに目を覚まして、たずねるということになかなかならないでしよう。自分は正しいと思つてている。間違つているのは世の中だという考え方がありますね。それは彼だけを責められないかもしません。

もう二、三日前にも五歳の女の子が実の両親によって虐待の末に死に至つてしまつたという事件がありました。今からあの両親は取り調べが始まりますが、おそらく

よくあるパターンで「虐待ではなく、躊躇していたんです。それなり

第42回 真宗大谷派 富山教区第11組  
**同朋大会**  
日時 2018年6月10日(日)  
午後1時半~4時(入場無料)  
会場 玉永寺(富山市水橋小出52 TEL076-478-0846)

記念講演 講師 一樂眞氏  
いちらく まこと 石川県出身 大谷大学教授  
同朋新聞にて「阿弥陀経に聞く」連載中

講題 「念佛の救い」

(講師から皆さまへ)『歎異抄』に「ただ念佛のみぞまことにておわします」という親鸞聖人の言葉が伝えられています。念佛のみがまことであるとは、それ以外のものはまことではないことです。しかし、この言葉は簡単にはうなづくことができないものではないでしょうか。  
「南無阿弥陀仏」は見たり、聞いたことはあっても、それがどんな意味をもつているかを改めて考えることは多いとは言えません。念佛を稱ることで救われるとはなかなか思えません。また、自分の人生には関係がないと思う人もあるかもしれません。南無阿弥陀仏が人間に何をもたらすのか、また人間にとつての救いとは何か。一緒に親鸞聖人に尋ねたいと思います。

真宗大谷派富山教区教化テーマ「をむあみだぶー」を始めませんか?

主催:真宗大谷派 富山教区第11組・組同朋会・組同朋会

みなさまぜひご参加ください

に一生懸命育てていたんですね」と。それなりにといったのは自分の思  
いに一生懸命なんですね。自分の思  
いに合う場合はいい子だと。思  
いに合わないと何でこんな子がう  
ちに来たのだと。どうやつたらい  
い子になるのだと暴力でそれを矯  
正しようとすると、そこまでいかなくとも私たちの中には同  
じような根性がありませんか。自  
分のいうこときいてくれる孫、大  
好きでしょ。おこづかいあげたくな  
には、おこづかいをあげたくない。  
自分の大事な孫であるのに気分次  
第でいい子になつたり、そうでな  
かつたりしてしまう。それが「本  
当のことを見えていない夢を見て  
いるような生き方なのではないで  
すか」という呼びかけなのです。  
目を覚ますということは、自分が  
やっていることは本当ではないの

ではないか。正しいと思い込んでいるが、そうではないのではない  
かと。ここに光があたるというこ  
となのです。

• • • • •

お釈迦様は二千五百年前の方ですが初めて人間の迷いに気づかれた。正しいと思ったことがそうではなくかったということが、はつきりしたと仰っています。お釈迦様のお生まれになつたインドという国は厳然たる身分の制度がありました。「バラモン」・「クシヤトリア」・「バイシャ」・「シユードラ」・この四つの階層です。上の「バラモン」というのは神に仕える司祭です。「クシヤトリア」は王族、貴族の階級です。「バイシャ」は

ない、「アウトカースト」と呼ばれる人もいます。それは前から決まっている。「バラモン」の家に生まれた人は「バラモン」の仕事をする。「クシャトリア」の階級に生まれた人は「クシャトリア」の仕事をしている。これは当たり前だったのですが、お釈迦様は、はっきりと仰っている。「人間は生まれによって尊いのではない。生まれによって、その人の価値が決まるのではない。どう生きたか。何をしたか。これがその人の人生が実りある人生であったか。それとも空しい人生であったかの別れ道なのです。生まれた家柄で人をはかる。これは本当ではない」と仰った。これが目を覚まされたことの一つです。

これはインドからすれば、ある意味常識をぶち壊すようなお話で、どうなつたかというと十一世紀頃

に結局、元のバラモン教というか  
ヒンドゥー教に戻っていくという  
ことがあります。ただ今も仏教に  
対して大事な思いを持つ人、特に  
日本から行かれた佐々井秀嶺とい  
う人がおられます。この人は  
「仏教は身分を問わないからヒン  
ドゥー教の中で身分に苦しんでい  
る人は、仏教に改宗しましよう」  
といって何百万人単位で仏教改宗  
運動を起こし、今も進められてお  
ります。ただインドの人口は十二  
億ともいわれておりますので、何  
百万といつてもわずか数%にも達  
しないくらいの人なのです。でも  
そういうことが繰り返されていま  
す。いいたかったのはインドの話  
ではなく、いろいろ決めつけてい  
ること。これが正しいという人間  
には答えがあります。これにスボ  
ットを当ててくださっている。こ  
れが本当かという問い合わせを当ててく

ださっている。これが仏教の大事なところです。

♪♪♪♪♪♪♪♪

私たちを考え、答えを早く手に握ることばかりに焦るのですが、

握ること、答えを握るとそれにあわないものは切つていくのです。先程は人を計る話をしましたが自分の都合の悪いものは嫌いといいましたが、

その物差は最後は自分にも当てはまるでしょう。元気で働いてお金

をもらっている時には、自分には価値があると言う。逆に働けなくなったり動けなくなったりすると、こんな体になってしまった。「いつもいっしょや」。これは答えなのです。自分で握った答案で人を計り自分でいます。これで苦しんでいるのではないですかと

らの教えなのです。お釈迦様は特に難しいことをいつているわけではなく、「あなたが握っている答えではない、「あなたが握っている答え。それは本當ではないのではな

いですか。」と。

仏教の話が難しいのはそこであり、答えを教えないのです。持っている答えが誤りなのです。こつちが本物の答えだと教えたら、また握り直すだけですから。今まで握った方の答えで、また同じことをするわけです。答えを問い合わせて行くことが、仏教の学び方の難しいところなのです。三帰依文の二つ目ですが、インドを例に出しますと「ダンマ」・「ダルマ」であります。これは法であります。

「ダルマ」というと皆さん「達磨大師」を思い浮かべますね。

「達磨大師」はインドから中国にこられて禅宗を開いたといわれています。壁に向かって九年間座っています。壁に向かって九年間座つておられて、自分の心の悩み、その正体は何かということを壁に向かって、めんべきくねん面壁九年と書きますが、

その中でさとりを開いていかれます。禅宗の祖でございますが九年間座り続けておられたのですか

答えを握って人を傷つけているのです。「大事なのは、その握っている答えから解放されることだ」。

「ダルマ」というのは、元タイ

ンドの言葉で意味は法則です。自

然界に法則はあります。水は高い傷つけあうことから解放されるのも法則があるということを教えて

くださっている。それをインドの言葉で「ダンマ」あるいは「ダル

マ」。

「ダルマ」というと皆さん「達

磨大師」を思い浮かべますね。

や民族が違おうが決して一切変わらないものを法則といいます。今

は厄介です。今は国の憲法とい

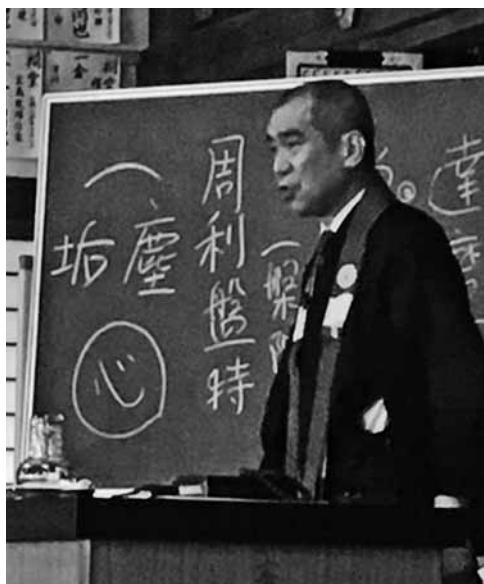
うことですら解釈でコロコロ変わることになっていますので、あんな

ことは本当は法則といつてはいけない。法則というのは変わらない

ものなのです。

お釈迦様は人間がなぜ苦しんだ

ら、足が萎えてしまい、私たちが見る達磨さんのあの姿になっているわけです。



### 講師プロフィール

1957（昭和32年）生まれ。大谷大学卒。

現在、大谷大学教授。専門は真宗学。

著者『親鸞聖人に学ぶ—真宗入門』『この世を生きる念佛の教え』（以上、東本願寺出版）、『四十八願概説—法藏菩薩の願いに聞く』『大無量寿經講義—尊者阿難、座より立ち』（以上、文栄堂）、『日本人のこころの言葉 蓮如』（創元社）など。

り悩んだりするのかという法則。

それに目を覚ました人。逆にいえば私たちはその法則に目を覚ましていないから、これは誰かのせいだ、あいつのせいだと、また苦しみ、傷つけあうことを増産していく。繰り返して上塗りしていくのです。先程の『正信偈』では、なぜ苦しみ悩むのかということは、無明という言葉で表されています。

邪見というところもあります。『正信偈』をスラスラ読んでいる時は、もう読み慣れているのです。

が、凄いことが書いてあるのです。私たちはこうやって生きているのです。無明の闇という言葉あるでしょう。でも真っ暗闇にいるなら誰かに明かりをくれというのです。あるいは道を教えてくれと。見えないから手を引っ張ってくれと。でも知っているという闇なのです。何でもわかっているという闇、先程の答えです。だから誰にも聞かないのです。俺は間違っていないという闇なのです。だから闇にいられないといふ人がいます。そんな人にいふつもいうのは「右の耳からも入ってないのではないか」と。ここで弾き飛ばしていると。聞きたくないということがあるのです。

なぜなら仏教なんかなくても大丈夫だと自信があるときは仏法を聞かないし、もっといえば人のいうことなんか聞かないではないですか自信満々の人は、ほつといてくれといいます。これは危ういの

ることにすら気づいていないといふ二重の闇なのです。真っ暗だったら誰か手を引っ張ってくれ、明かりをくれというのですが、明かりが必要ないというのです。教えてもらう必要がないと思っているのです。ややこしいでしょう。危うい道を歩いているのです。私はブツダなんかいなくとも大丈夫だと。

「右の耳から左の耳へですわ」と言う人がいます。そんな人にいふつもいうのは「右の耳からも入ってないのではないか」と。ここが『正信偈』に書いてあるのです。

『正信偈』を読んでいる人は自分がのこととして読んでいる人はいませんか。邪見とくれば憍慢でしよう。憍というのは、おごりたかぶるということです。高上りする

です。無明の闇、これが迷い苦し

み、傷つけあうことの根本なのだと。見えていないということは何

も知りませんとなるかといえばそ

うじゃないでしょ。必ず誤ったも

の見方を正しいと思い込む。だ

いたい世の中は、正しい人と正し

い人が諍いをする。国対国、正義

と正義が戦争するでしょ。正しい

人と間違っている人ではケンカにななりません。どっちも俺が正しい

といってケンカをするのです。

「みんなこうなっているぞ」とい

うことが『正信偈』に書いてある

のです。

ことです。慢<sup>あなど</sup>といふのは侮る、馬鹿にするということです。他人を馬鹿にしたり、私みたいなものはダメだといって自分を落とす場合もあります。正しくないものの見方で自分を高上りしたり落としたり。そして最後お互い傷つけあってことになるのです。これを悪衆<sup>あくしゅ</sup>と親鸞聖人は仰っている。ものになるのが怪しいのに、これを基準にして生きていますから意義があるとかないとか、勝ったとか負けたとか、最後には生きている価値があるかないか。ここまでやるのです。そうやって傷つけあつているのです。

はじめの若い夫婦も五歳の女の子を育てようとして、このままでいいかんと思つて、子どもを裸にしてベランダに出して足の裏をしもやけにさせたのです。恐ろしいことですが、ああいうことには悲

しい背景がだいたいあるのです。事件が公になってくると見えてくるかもしれません。自分もそうやつが正しいと信じ込んで、ひどいことをしてもひどいことをしたと思われるのです。虐待は連鎖するという。育てるということには「思い込んでいる」ということがあるのです。あの若い両親もひょっとするとそ生と親鸞聖人は仰っている。もとになるのが怪しいのに、これを育てられたということがあるのです。虐待は連鎖するという。育てて育てられたということはあるのわないので。だから親鸞聖人は危うい人間だということを「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべし」と仰っているのです。

親鸞聖人のお言葉を借りれば、ことになったのかもしません。親鸞聖人のお言葉を借りれば、不謹慎かもしませんが最近テレビは、ああいう事件が起こると必ずいろんなコメントテーターが出演するでしょう。たいがい「信じられません」「人間のすることじやありません」と。言っていることは間違いないですが、あの席に親鸞聖人がおられたら、どう仰るのかなと思うのです。親鸞聖人が仰るとすれば「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべし」の言葉の前後を見れば「人間がないという弁護の言葉ではあり

ません。危ういということです。自分の思いを中心にならべたら、これが正しいと信じ込んで、ひどいことをしてもひどいことをしたと思われるのです。私はたまたま、いろんな歯止めがあつたり、いろんな教えをいただいて今そういうことをする縁がないだけです」と仰る。やつた人だけを裁いても終わらない、世の中全体のことを問おうとするものが親鸞聖人という方ではないかと思うのです。でもそんなコメントテーターは、たぶん次の週からクビになるのです。テレビは早くわかる答えが好きなのです。長いコメントは全部切られますから短くなるのです。

「一分でわかる」とか、ああいふうのはよくないです。「一分でわかる仏教」という番組があつたらテレビを消したほうがいいです。

一分でわかる仏教って怪しくないですか。でも早く答えを知りたいのです。誤った答えを塗り固めているだけかもしれません。これが何とか解放されてほしい。ブッダが法則、ダルマを説かれた意義なのです。これによって開かれる人間関係、人間だけじゃありませんが開かれる関係、これをインドの言葉でサンガといいます。これを翻訳すると和合といわれます。サンガを「僧伽」と書きますが、これを省略して「僧」といいます。僧といえば日本ではどうしてもお坊さんのように見えてしまいますが、そうではありません。ブッダがお説きになられたダルマ、法則によつて傷つけあうことを超えた世界、そういう関係を和合といふのです。調和して輝かしあうよくな関係、世界これをサンガというわけです。だから「仏に帰依し法

に帰依し、そしてそれによつて開かれるサンガを頼りに生きていきます」。これが先程の三帰依文であります。

人間関係だけではないといったのは、例えば人間はどうしても自分のことを中心にすると人間にとつて便利なものが便利でないもの、使えるものか使えないものとして自然界に全部計るでしょ。だから山には売れる木をどんどん植えることになります。その結果、鹿や熊が食べる木の実がなくなつて人里のほうに下りてくる。熊がひどいといいますが、熊が生活できないうような山にしてしまつた人間の問題があるのです。

うちの女房の弟は九州の柳川といふところに住んでいます。そこには有明海という大きな海があります。そこで弟のつれあいが海苔の養殖の漁師の話をしてくれまし

た。海から幸をいたたくのが海苔の漁師さんなのです。その漁師さんが二十年ほど前から山に木を植えに行ってます。なぜそんなことになつたかといったら川の水がミネラルを含んでないと。海は大きい海なのに、だんだん海苔が不漁になつていく。山が壊れているということがわかつてきました。漁師が山に木を植える。海というのは恵みの海だったんですが、諫早湾はご存じのとおり干拓事業で閉門してしまいました。だから獲りつくしてきたということがあるわけです。富山は富山湾という凄い湾がありますが、これも永遠といふわけにもいきませんね。富山湾といえども海の幸は限りがあるわけです。そういう使えるものと使えないもの、人間にとつて得なもの損なものといつて見る眼が自然界を壊してきたということがあ

ります。私は京都に住んでまして、生ゴミを出しに行くことがたまにあります。そしたら毎回くるカラスがいます。わかつているのですね、あのカラスこの間もいたなというやつです。でもカラスが増えたのは人間が食べられるものを出すでしょ。昔はああいう生ゴミなんて一切なかつたわけです。腐つたものでも堆肥にして畑に使つていたのです。ゴミというものが本当になかつた時代。今は食べられるものまで捨てられる。コンビニエンスストアの弁当もそうです。何時までと決めてあるのをどつかのコンビニエンスストアが半値にして売つたら、そんな勝手なことするなど大元からお咎めをうけたので

るのです。そういうことで仏法によって開かれるサンガといふのは、自然界との繋がりも含めます。人間だけの関係ではありません。私は京都に住んでまして、生ゴミを出しに行くことがたまにあります。そしたら毎回くるカラスがいます。わかつているのですね、あのカラスこの間もいたなというやつです。でもカラスが増えたのは人間が食べられるものを出すでしょ。昔はああいう生ゴミなんて一切なかつたわけです。腐つたものでも堆肥にして畑に使つていたのです。ゴミというものが本当になかつた時代。今は食べられるものまで捨てられる。コンビニエンスストアの弁当もそうです。何時までと決めてあるのをどつかのコンビニエンスストアが半値にして売つたら、そんな勝手なことするなど大元からお咎めをうけたので

握った答えをすてられない。

す。一軒のコンビニエンスストアが一日二十食の廃棄が出たとしますから何十万食、毎日棄てられるということ起こっているのです。恐ろしいことになります。自然界からいだいた命。これを命として活かしきることができないばかりか商品としてしか見れなくなっている。物なんですね。全部お金で換算するわけでしょ。命をいただいて今日の命を繋ぐという、それが本当の世界だと思うのですが、全然見えなくなっている。それが先程いいました無明であり、そして我だけは間違っていないと思いに立つて人を裁き、最後は自分すらも生きてる価値がないとか、いろいろな限り人間はその自分の当たらぬ限り人間はその自分の

私は本山のお仕事で『同朋新聞』の毎号、一頁程度、『阿弥陀經』を少しづつ解説しながら書かせてもらっています。あの中に出てくる大変有名な周利槃特しゅりはんとくという人がいます。『阿弥陀經』では周梨槃陀迦とよんでいます。お釈迦様のお弟子さんの一人で大変有名です。なぜ有名かというと物覚えが悪いことにかけては天下一だったそうです。それで世間の仕事が間にあわない。仕事が覚えられないと仕事を任せられませんね。だから私は世の中で間にあわないと思って悩んでいたところ、お兄さんが先にお弟子になっていたのです。それでお兄さんの勧めでお釈迦様のお弟子になるわけです。ところがその時お釈迦様のもとでは、やは

り学び方はお釈迦様の御言葉を大事にいただきながら、それをため続けいく。こういう学び方ですからまず言葉をいくつか覚えなくてはならないわけです。ところが、たった四句の偈文を三ヶ月経つても覚えられなかつたというのです。四句を三ヶ月称えていたが覚えられないという中々の筋金入りでしょ。これで私は世間でも迦様の弟子としても失格だと。もうお暇をだしてもらおうと。私はここでもダメだと思つていた。

その心をお釈迦様がお知りになつて「周利槃特よ、言葉が覚えられないのならそれでも構わない。今日から掃除をしなさい」といったのです。それが有名な「塵を払いましよう。垢あかを除きましょう」ということを称えさせて掃除をさせたという話です。そこで面白

いことが起こるのです。何ヵ月かする内に塵とは何だとか、垢とはなんだと考えるようになつたそうです。地面に落ちているゴミだけをお釈迦様は綺麗にしろというのか、汚れている壁の垢をとれといふのか考えるわけです。塵とは何か、垢とは何かと。そして遂に気づくのです。お釈迦様が取り除けていったのは私の心に付いていた塵と垢だったと。物覚えが悪いから自分には価値がない。だから生きていっても仕方がないと思いつ込んでいたわけですが、お釈迦様は未だかつて一度でもあなたには価値がないなんていったことはありません。あなたはあなたとしてあなたの命を尽くしてほしい。これがお釈迦様の教えです。いろんな縁をいただいてこの世に誕生して、必ず命が終わっていくわけでしょ。限りがあるからこそ今日ここにあ

るということがどれほど重いことか。これを教えておられる。お釈迦様は周利槃特のことを馬鹿にしたことは一度もないのです。それなのに物覚えが悪いから私には価値がない、生きている値打ちがないと決めつけていたと。これが私の心に付いていた塵であり垢であった。これを取り除けというのがお釈迦様の教えだったと気がついて嬉しくなって涙を流したといいます。だから周利槃特も嬉しかったのですが、お釈迦様も嬉しかったのです。よく気がついてくれたということです。

して生きていくことにはつきりした。これはさとりの法則です。念のためにいいますが周利槃特は急に物覚えがよくなつたわけではないのです。何にも変わりません。一つだけ違うのは物覚えが悪いのはダメなことだということから解放された。物覚えが悪いから生きている価値がないと決めつけていた答えから解放された。これが大事なのです。お釈迦様も喜んで周利槃特に「よく気がついてくれた」と。

ここがお釈迦様の説法の大要なところで、お釈迦様がいくら「あなたは物覚えが悪くても大丈夫だ、わけではないから」といっても周利槃特は聞かないでしょうね。お釈迦様のお言葉でも聞けない、なぜかといえば「お釈迦様はそう仰つ

てくださるかもしませんが周りはそんなことをいってくれません」。「お釈迦様はいってくれるけれども世間が許しません」と、こうなる。だからお釈迦様といえども本人が気がつくのを待つしかない。だからお釈迦様が周利槃特の心に手を突っ込んで垢を取ってくれるというわけにはいかない。本人がこれは不要なところに捕らわれてさとった」といいました。さとりはそういうことなのです。自分にとってはそういったことです。自分でいたということを本人が目覚めることを本人が目覚めるしかない。これがお釈迦様の説法の大要なところです。お釈迦様が周利槃特を救つたのではなく法が救つたのです。その法をあの手この手でお説きになるのはお釈迦様ですが、お釈迦様が周利槃特の心の垢を取り去つてくれたわけではない。一人ひとりが気がついていくという意味では手間がかかる

お一人おひとりに向きあいながら説法をしていった。パートと説いたらみんな急にさとつた。そんなことはないのです。一人ひとりの苦しみ悩みに寄り添つてそして法を説かれた。周利槃特は心の垢に気がついて計らなくともいいことで苦しんでいたと気がついた。

それをお釈迦様は「周利槃特がさとった」といいました。さとりとはそういうことなのです。自分は今まで勘違いしていた、間違えていた、本当ではないことを本当にと思いこんでいた。それに気がつくことがさとりなのです。難しことを覚える話ではないのです、仏教用語なんてないでしょ。

「塵を払い、垢を除かん」といつているだけで仏教の難しい教理を覚えることではないのです。捕らわれていたことからの解放。決めてつけていたことからの解放。

そんなことで計る必要がなかつたと気がついた。そしたら私は私と

後日談がありまして、周利槃特がさとったということを聞いて他の弟子の中には「あんな愚かな周利槃特がさとれるのならお釈迦様のさとりも大したことないな」といって、お釈迦様の元を去っていった人がいるそうです。その人たちはお釈迦様を立派で偉いと思ってるから弟子にくつづいていたのでしょう。でも自分よりも愚かだと思う周利槃特が先にさとったと聞かされたら腹が立つたのでしょうか。「あんな奴がさとれるさとりならいらない」となったのでしょ。ここにも色々ある。お釈迦様のお弟子といつても握っている答えがあるのです。だからお釈迦様も本当に一人ひとりにあなた方が掴んでいる、握っている。これは間違いないと思っている。それから解放されなさいということをいい続けている。こういうお方です。

利槃特がさとれるのならお釈迦様のさとりも大したことないな」といって、お釈迦様の元を去っていった人がいるそうです。その人たちがいるから弟子にくつづいていたのでしょう。でも自分よりも愚かだと思いつつ、お釈迦様を立派で偉いと思ってるから弟子にくつづいていたのでしょう。

その意味で仏教の救いというのは難しい話ではなく、決めつけから難しい話ではなく、決めつけから解放です。良いか悪いかは分けてるでしょう。分別からの解放といつてもいいでしょう。

得か損か、敵か味方か、色んな分別がありますが、その決めつけから解放です。もう一つややこしいのは私たちは分別したことを見違いないと思っていますから握っています。これは執着ということです。捕らわれてそこに居着いてしまっている。もう離れられない執着からの解放。これが仏教の中の救いなのです。周利槃特はお釈迦様の教えを聞いたう急に物覚えがよくなつたということと違うでしょう。変わらないのです。でも物覚えが悪いから自分が価値がないダメな人間だということから解放された。ここに物覚えが悪いままに生きていく道が開かれるといふことなのです。

このあたりをお聞きになつてから、「何だこんなものご利益でも何でもない」といわれる。やはり私たちが考えるご利益は困ったことが解消されることでしよう。病気だったら病気が治ったとか、仕事が上手くいってなかつたら上手くいくようになつたらたすかる。まあ人間の欲からいえばそれが救いだと思つてはならない。それが救われたとしても次はこれが都合が悪く、邪魔者をつくる私がいた」ということに気がつかされました。

昔こういう話を聞かせてもらいました。会社勤めをしていたとき、「あいつとだけは馬があわない」というかどうかもそりがあわない。何をしてもぶつかる。あいつとだけは仕事をしたくない」と思つて

いたらその祈りが天に通じたのか、その人が転勤になつたというのです。ところが長続きしなかつた。「ヤツタ」と思つたけれどもその人が戻ってきたのですか」という話です。「何ですか、またそれが考えるご利益は困ったことが解消されることでしよう。病気だったら病気が治つたとか、仕事が上手くいってなかつたら上手くいくことは二番手、三番手は目に入らつきまましたが違うのです。「次に気に入らない奴が出てきた」とつまり一番気に入らない人がいるときは二番手、三番手は目に入らなかつたと。一番気に入らない人がいなくなつたら、次こいつも気が入らん、次はこいつも、といつて。「ああ邪魔者がいるのではないか、邪魔者をつくる私がいた」ということに気がつかされました。

つまり邪魔者を取り除いたからたすかるのではなく、次はこれ、次はこれといつまで経つて落ち着かないのではないですか。

最後は自分の体ですら「昔は良かつた、こんな歳になつて、こんな体になつてしまつて」と自分の体ですら文句をいわないといけない。

結局邪魔者を作つているこの根性の問題なんです。邪魔者をなくしてからの救いではあります。周利槃特といえば物覚えが悪いのが利槃特でいえば物覚えが悪いのが治つてからたすかたのではありません。そこに道が開けたのです。私たちでいえば病気が治つたらなんていいますが、そういうているうちにまた次の病気が起つたりします。問題はその真っ只中に道が開けることでしょう。「これが治つてくれないのなら私が生きていてもしょうがない。」そうやって自分を追いかけていくのです。

そうではない。邪魔者だと思っていたことが実は大事な大事な自分の人生の中身だったというふうにいただけるということが起きるの

です。

これが仏様との出遇いといいますか、この仏陀（自覚めた人）の教えをおして何に苦しんでいたかがはつきりした。自分の心の垢に気がついた。周利槃特の話です。ここに愚かな私は愚かなままに生きていく道があった。これは誰かと比べて自分を計る必要がない世界でしょう。比べている間は上の人は引きずり下ろしたり、誰かを

下に見て自分が上だといったり、そうやって人間関係がギクシヤクしていくのです。そういうものが開けることでしょう。「これがのから解放。これが仏・法・僧の三法に帰依するとありました。

親鸞聖人のところに話をもってきました。お釈迦様にすれば文句をあります。元々のお釈迦様のお弟子の周利槃特のお名前を挙げさせていただきまして、仏にお遇いするということは、実は今まで自分の物の見方が本当ではなかつたわけですが、親鸞聖人が悩まれたのはここです。分別からの解放、執着からの解放といいますが「今日から分別しないように」とならぬく仏が何を教えてくださつてい

もっと難しいでしょ。私は執着だいぶん離れました」と言えれば、それも執着ではないですか。「私は相手に応じて説いていますから、いろんな説き方があるのです。それが対機説法といいます。機といふのは人間の状態です。機が熟している時でないと、いくらお釈迦様でも語れないことがあります。例えば『仏説觀無量寿經』の韋提希は息子に裏切られて宮殿に閉じ込められ、はじめは泣き叫んでいました。お釈迦様にすれば文句をいってる。そんな時にお釈迦様はしゃべっておられないです。お釈迦様が説教すればなんとかなるといふわけにはいかないのです。韋提希の心が落ち着いて説法を受け止める機が熟したところに法をお説きになるということをおきます。そういう意味でいうと対機説法とはベラベラしゃべっているわけで

はありません。じーっと待つのも機に対応する姿です。お釈迦様は機に対応しながら法を説かれた。これを例えていうと応病与薬といふでしょ。病に応じて薬を与える。これは当たり前というかも知れませんが、何に悩んでいるか何に苦しんでいるのか、これを見抜くことを見立てる必要があります。違う薬を出して、一生懸命飲んでいたのに一向に良くならないってことがあります。だから今、何に病んでいるか何に苦しんでいるのかを見定めることができることなのです。

周利槃特の話でいえば、あの物語には阿弥陀仏が全然出てきません。だから一見すると阿弥陀様と関係ない物語に見えるかも知れません。そうではないのです。お釈迦様が説かれておられる内容、それが実は阿弥陀の世界であります。人と比べる必要がない、阿弥陀と直してくださるのは無量寿と。いうのは我々が意味の分かる漢字をとおして周利槃特は阿弥陀、無量寿といういのちに気がついたいのち、これをインドの言葉で阿弥陀といっているわけです。分量で量ることの出来ないようなと関係ないといつたら良いですか。良いとか悪いとか、勝ったとか負けたとか、値打ちがあるない、そんなことで量れないのちを阿弥陀という。

ですから周利槃特はこれに気がついたのでしょう。自分は物覚えが悪いからダメだと勝手に決めつけていたけど、そうじゃないといふことをお釈迦様をとおして知らされた。阿弥陀という言葉がなくとも阿弥陀の世界をお伝えしたい、阿弥陀の世界に気がついて欲しいのですがお釈迦様のお心ですね。それを口でいう時には掃除しようと、比叡山で修行しておられる



時は、阿弥陀の教えは修行出来ない人の道だと思っておられたでしょう。もちろんナマンダブツと比叡山でも称えておられるのですが。たくさん修行の一につき、修行して物事を正しく見る智慧を獲得する。執着を離れていく、これで二年修行した。しかし何が起こったかといえば二十年修行したら釈迦様の教えをとおして、「ああそうだったのか本当の世界は無量寿だったのですね、阿弥陀だったのですね」ということに出遇う。これが大事だということです。

そういうふうに比べあうことが同じ修行をしている仲間同士でも起きるので。ここに親鸞聖人は仏法を学んでいるといいながら全然学んだことになつていらないじゃないかということを感じられたと思います。そんな中で二十九歳の時に法然上人に出遇います。この法然上人からのお言葉が『歎異抄』第二章に伝えられています。

「親鸞におきては、ただ念佛して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信するほかに別の子細なきなり」

(『歎異抄』聖典六二七頁)

この「よきひとのおおせ」法然上人のおおせの内容が「ただ念佛して、弥陀にたすけられまいらべし」という言葉なのです。「ただ念佛しなさい、阿弥陀仏にたすけられなさい」こういうことなのです。これを聞きして承って信ずるほかに何も特別なことはありません。この私(親鸞)においてはこれが全部です。そういう言葉なのです。

私は初めこの言葉を聞いた時は簡単に受けとめられませんでした。なぜかとすると命令されていました。なにかといふと命令されてしまうように聞こえたからです。「た

だ念佛して」といわれて阿弥陀仏にたすけられなさいといわれ、そんなことを強制されたくないわけです。大体がひねくれているのですが、反発する根性が湧いてきて素直に聞けなかったのです。そしていろんな先生が日々に、これが大事ですよという。どの授業を聞いても「これが真宗の教えの要ですよ」といわれるたびに「わからんわからん」とずっと思つていました。

そんな私でも長年お育てお聞かせいたで、お育てにあずかるということを実感いたしますが、今はこんなふうに受けとめています。「弥陀にたすけられなさい」ということは、阿弥陀仏に、たすけられなさいと言えますか。たくさんお經を読んだら人を妬まないようになりますから、阿弥陀仏もいる、大日如来も薬師如来もいる。どの仏さんが、ご利益があるとかそんな話ではないのです。阿弥陀の世界に遇わない、たすかることのない私です。阿弥陀の世界に遇わないと、たすかることがありますよ」ということです。それが「あなたは弥陀にたすけられなければいけませんよ」ということの中身です。

邪魔なことが取り除かれますよという話でもない。阿弥陀仏にたすけられなさいということは「あなたは阿弥陀に遇わない、たすかさにこの言葉は風船が膨らんだところに針がパーンと刺さるような形でいただいたわけです。「ああ、私のことだ。私のために阿弥陀は本願を立ててくださっていた。阿弥陀は淨土をお莊嚴してくださっていました。阿弥陀に遇わない、たすかならない、というのは私なんだ」ということがわかった。だから阿弥陀さんに、たすけられなさいと言わせて、仏さんをいくつか眺めてみますか。たくさんお經を読んだら人を妬まないようになりますから、阿弥陀仏もいる、大日如来も薬師如来もいる。どの仏さんが、ご利益があるとかそんな話ではないのです。阿弥陀の世界に遇わない、たすかることがありますよ」ということのない私です。周利槃特のこといでいえば、比べる必要のない世界となつたところで初めて物事の良い悪いから解放された

ということなのです。

阿弥陀にたすけられなさいといふことで、例えば御本尊の形をしたものがありますが、その仏像が何かしてくれるという話は違うでしよう。無量寿の世界に出遇えとすることです。仏像が何かしてくれるということになると、大きい仏さんの方がいいのではないかといふ話になるのです。「大仏信仰」が流行るときは大体そんなときです。世の中がうまくいかなくなつたら、大きい仏さんなら何とかしてくれるのではないかという話です。それは信仰深いように見えますが、その大きさは欲の大きさなのです。「これぐらいしておけばご利益があるだろ」という話でています。仏さんということは私の都合のいいことをしてくれるお方ではありません。そうではないの

です。都合がいいか悪いか、そういうことを思っていたことから解放されなさいということです。あたかもしません。あつという間にそれが邪魔者、これが邪魔者と決めつけていたことから解放されない。そういうことを親鸞聖人は二年間修行していたからパーンといふ。そういうことを引き戻される私ができるわけです。忘れやすいといふわけではなくて世の中が厳しいのです。だって世の中は、やはり価値があるとかないとかいう話ばかりでしょ。これは儲かる、このこと一つが要ですよといふことです。それは私たちは仏さんを念ずるということをすぐ忘れるからです。今日、阿弥陀さんとの話を比べる必要のない世界で、大きな話をして比べました。そらういう話をしました。「そらうやなあ」と思つてくださった方もいるかもしれません、これは自分が利害があるだろ」という話でます。それは仏さんと私の都合のいいことをしてくれるお方を聞かせてもらつたなあ」という

気持ちがあつても前の道に出た時に車がパーツととおって行つたら「危ないわ、バカヤロー」となるかもしれません。あつという間に私がいるわけです。忘れやすいといふわけではなくて世の中が厳しいのです。だつて世の中は、やはり価値があるとかないとかいう話ばかりでしょ。これは儲かる、このこと一つが要ですよといふことです。それは私たちは仏さんは損するという話でしょ。仏さんの話をいつ聞きます。阿弥陀さんの話をいつ出遇います。毎日お内仏にお勤めしている方なら親鸞聖人の説法に出遇っている。「帰命無量寿如来」といって親鸞聖人から大事なことを聞かせてもらつ。それすらもおろそかになるということだつたら「また来月だね」ということになる。来年の報恩講ということになる。えらいことです。聞いていても聞いてもわかる質問に対しても、仏法を聞くのと三度の飯とどっちが多いのかと聞かれたそうです。三度の飯は忘れないです。仏法をそろそろ聞いていますかという話です。聞いても聞いてもというほど実は聞いていないのですよ。世間のことは毎日です。勝つたか負

どれだけこの阿弥陀さんことをいただいていますか。数えるほどなのです。

昔、石川県に「蓬茨祖運」とい

ほうちそうくん

う先生がおられて、私は直接お話を聞かせていただき機会はなかつたのですが、父や周りにいる人がいたもので、「蓬茨先生が」と

「真宗の教えは聞いても聞いてもわかりません」といつたそうです。

そうしたら蓬茨先生は「三度の飯とどっちが多いですか」といつた

そうです。聞いても聞いてもわから

りませんという質問に対しても、仏

法を聞くのと三度の飯とどっちが

多いのかと聞かれたそうです。三

度の飯は忘れないです。仏法をそ

れぞろい聞いていますかという話

です。聞いても聞いてもというほど実は聞いていないのですよ。世

間のことは毎日です。勝つたか負

けたか、得か損か、そればっかり。これは生まれてこの方ずっとその世界で馴染んできますから、人から言われなくても、自分の発想がもうその中にがんじがらめです。ナンマンダブツをいただく時だけ、それから少し解放されるわけですよ。「ああ、また愚かなことになつてました」「またこだわらなくともいいことに振り回されていました」「また比べなくともいい世界に飲み込まれていた」と念じた時だけ思い出せるのです。

だから「念佛して生きていけ」というのは、忘れる私たちを見越して法然上人が仰ってくださっているのです。法然上人は実際、お念佛を一日七万回称えておられたそうです。でもこれは回数の問題ではない。阿弥陀の世界を信じ続

けて日暮らしをしておられたということです。それが七万回という数になったので「俺は七万やつとるぞ」とそんなことはいつてません。ところが弟子の中には勘違いする人が出でます。「法然上人の七万には及ばないが三万ぐらいがんばろうか」というように。何が起こるかわかるでしょ。「法然上人にはかなわないが、お前よりもつけ奥さんももらわずに。そして戒律をたもつて生きていた。ど仏ではないでしょ。こんなことは仏ではないですが、あえてわかりやすくするために書きますと「聞法をしている私は立派」とか「毎日お参りしている私は立派」あるいは全部「我<sup>われ</sup>」を念じてている私は偉い」「一日百遍唱えている私は偉い」などなど念佛も大事だが、他のこと

ら法然上人のお心もなかなか伝わらなかつたのです。回数に走る人がいた。法然上人は「ただ念佛一つ」と仰つたのに、その後どうなつたかといったら、他のことにもどらわれるのです。

法然上人は一生涯お坊さんとして生きられました。頭も剃り、衣もつけ奥さんももらわずに。そして戒律をたもつて生きていた。ど仏ではないが、お前よりマシだ」とやるわけです。これ念佛ではないでしょ。こんなことはも大事かもしれないが出家の僧侶も大事かもしれないが、出家したかというと「やはり念佛が中心やろう」という話になつていく。「やはり修行しないよりはした方がいいね」あるいは「戒律をたもつて唱える念佛の方がもっと値打ちあるのではないか」「おなじナンマンダブツでも勉強した人の念佛の方が深いのだ」どんどんそういうふうになるわけです。

そこには親鸞聖人は「要は何か」ということを確かめるお仕事をなさらないといけなかつたのです。だから親鸞聖人は決して法然上人のお仕事が何か足りなくて淨土真宗と仰つたのではないのです。「法然上人の教えが仏教の要だ。ここに眞実の教えがある」といただかれたのですが、それを勘違いして、また比べあう人が出てくるのですから「そうではない。ただ念佛一つですよ」と仰つた。自分で誇るのは全部自力の念佛。何回したとか、何年やつてきたとか、あるいはお経の言葉を知つている私の念佛の方が深いだろうとか、全部自分の自慢でしょ。それを自力の念佛というのです。

それをはっきりさせるために親鸞聖人が仰つたのが、念佛は「阿弥陀からの呼びかけ」ということ

です。「招喚の勅命」ということなのです。招き呼ぶ、勅命。私たちを呼んでください。勅命というものは元々中国の由来ですが、皇帝の命令とか日本では天皇の命令のことを勅命というのです。それをわざわざ使って背くことのできな、本当に聞かねばならない命令。これは阿弥陀仏が私たちを招いてくださる。呼んでくださいる命令だと。

うのは、それを聞いておられたわけです。ナンマンダブナンマンダブと称えるのですが誰かに言つてゐるわけではない。「阿弥陀の世界を大事に生きていく」「阿弥陀の世界を大事に生きていく」これを聞いておられた。称えても称えても、それは私への呼びかけだと。これを親鸞聖人がはつきりと仰いました。先程も一緒にお念佛を唱和しましたが、誰かに聞かせてるわけではないでしょ。あの声は実は私自身が呼ばれている声です。「阿弥陀だから南無阿弥陀仏」というのは「阿弥陀仏に南無しなさいよ」という呼びかけであります。「我が国に生まれようと思つてください」「無量寿の世界を生きてください」「比べなくてもいい命を大事に生きてください」これがナンマンダブツという言葉です。だから法然聖人は一日七万回称えていたとい

るとか、声の大きさがどうですとか、そんなことをいう必要がない。極端な話、声帯がやられたら声が出なくなつてお念佛できないのか。違います。ナンマンダブツ。自分の口の中でいつても自分は聞ける。自分が阿弥陀の世界に生きてくれよ」「阿弥陀の世界を生きてるか」「また物差の世界に舞い戻っているのではないか」という呼びかけなのです。それをいただくのです。法然上人が七万回称しておられたということは七万回呼んでいたのです。一声一声が「阿弥陀の世界を生きよ」というふうに聞いておられた。これが法然上人のお姿です。これをわからぬ人が「七万には負けるが三万ぐらいがんばろうか」となつてしまつたものですから、親鸞聖人

は「違う。たつた一声でいい」といういい方をなさつた。そこに大事なことを気づかせてもらつた。回数を誇るための念佛ではないのです。ましてや声の大きさとか勉強の度合いを威張るための念佛ではないのです。それが阿弥陀の世界をいただき続けていかれた。いい方を変えれば私たちの根性が治らないからこそそのお念佛です。例えば、今日から阿弥陀のお話を聞いて、後はわけへだてのない心で生きていくのであれば、もう「ナンマンダブツ」がなくとも大丈夫です。しかし「もう比べることがなくなりました」。それは嘘です。「もう人を妬んだりしません」。それも嘘です。そういうことがなくなりました。それは大丈夫です。しかし「もう比べることがなくなりました」。それは嘘です。「もう人を妬んだりしません」。それも嘘です。そういう心があるからこそ、そういう根性が湧いてくるからこそ、それがご縁となつて「ああ、いくつになつても根性が治らん。親鸞聖人の仰るとおりだな。煩惱具足の凡夫、

親鸞聖人のお言葉「おりだな」ということが知らされる。それがまたともにお念仏をいただいて皆お仲間でしょう。

自分が少しでもましになつたといふ根性があると、「あの人まだあんなことっている」「あの人、長年お寺にかよつてているのにケチだ」仏法を聞いたらケチが治るかのようなことをいうのです。根性がましになるかのようにはいふのです。人のことはわかるかもしだせんが、自分はどうだということです。何年聞いてもそういうことがあるでしょ。たまにあります「今日の話はよかつた」といわれることがあります。前までは恐ろしくてどこがよかつたのか聞けなかつたのですが、最近は「どこがよかつたで



すか」と聞くのです。すると「声が大きいのがよかつた」大概そいうのが「いやあ、今日の話はよかつた。家の息子に聞かせてやりたい」「ええっ、どうのことですか」と聞いたら「今日の話を息子が聞か」と。私はこういふのです。

「自分の根性も治らないのに、息子を変えてやろうというのは虫が良すぎませんか。自分がどれだけ変わりにくいか、見つめるのが大変ではないですか」。

少なくとも親鸞聖人は九十歳で亡くなられるまで「愚禿釈親鸞」と仰つたわけでしょう。「愚か」である。だからこそ念仏しなければならないと仰つた人です。もう間違いを犯しませんとか、こんな私になれたとか、これっぽっちも

### 〔悪人成仏〕

（『歎異抄』聖典 六一七頁）

いつてないのです。親鸞聖人ですらそうなのですから、私たちが少し聞いたらだんだん欲が薄くなつてきましたとか、腹も立たないようになりますとか、それは嘘です。だから、治らぬからこそ念仏です。もっといえば、治らないもののために念仏がある。初めにいった言葉でいえば「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」という、危うい人間だからこそ、この教えをいただかなければならぬのです。危うく

なくなるのだったら、念仏がなくとも大丈夫です。そんな人はいるのだろうかということです。

これを強調している、親鸞聖人の教えでは、

・・・・・

少なくとも親鸞聖人は九十歳で亡くなられるまで「愚禿釈親鸞」と仰つたわけでしょう。「愚か」である。だからこそ念仏しなければならないと仰つた人です。もう間違いを犯しませんとか、こんな私になれたとか、これっぽっちも

いつてないのです。親鸞聖人ですらそうなのですから、私たちが少し聞いたらだんだん欲が薄くなつてきましたとか、腹も立たないようになりますとか、それは嘘です。だから、治らぬからこそ念仏です。もっといえば、治らないもののために念仏がある。初めに

正しいと思って、そしてお互い傷つけあつてゐる。そういう悪なのです。わざと悪いことをしてやろ

うと、そう始めから思つてゐる人間はなかなかないのです。一生懸命生きているつもりでも子どもたちこそ、この教えをいただかなければなりません。危うく芽を摘んでいく、子どもをつぶすということをやつてしまふので

す。育てているという名のもとに子どもをつぶしてしまった。そんなものをたすけようというのがお念仏の教えだと仰るのです。

これを引っ張っておられるお経の例でいうと、ある親に子どもが七人いたとして、どの子もかわいいのだが、その中に今、病氣で苦しんでいる子どもがいたら、真っ先にその子のことを親は気にかかるでしょうというたとえがあります。あの六人はどうでもいいという話ではないのです。やはり病氣で苦しむ子が先なのです。それと同じようにお釈迦様、あるいはいろんな仏様も皆そうなのです。

すべての衆生、生きとし生けるものを感じる心、慈悲の心をお持ちなのだが、今、生き方を見失っている人を目当てにする。今、苦しんだり傷つけあうようなことになつていてる人を真っ先にたすけようと

する。これが仏の慈悲の心だとお経に書いてあります。他の人はどうでもいいわけではないですが、誰からたすけなければならぬかということです。

別れたとえでいうと、目の前で溺れている人をまずたすける。岸の上にいて溺れる心配のない人は後回しでもいいのです。まず、今溺れている人、それは誰のことかというと私たちのことなのだと。それが親鸞聖人のおられたところなのです。「わしは大丈夫だ」とはいわないのです。教えがなかつたら、この世間の価値観の中で溺れ続けるでしょう。

これは、今の話ではないのですが、私も、今年六十一になるのですが、大谷大学に行ってからもう四十二年という月日が経ちました。仏教に縁をいただいているのですが、根性は治らないです。これは

自慢しているのではないです。でもそういうお前のためにあるのが念仏の教えだということを仰ってくださるのが親鸞聖人なのです。もし根性が治つて過ちを犯さない。人を妬むことも憎むこともない。そんな人間になれるのだつたら、お念仏は卒業です。でも、そんな人はいないだろうというところに親鸞聖人はおられるのです。皆、同じお念仏をして教えに導かれていく仲間だということがわかれば、皆、愚かな凡夫なのです。そういうことを聞かせていただきながら、そこもまた比べるでしょう。「わしも愚かだが、あいつも愚かだ」と。それともそういうところを超えた

長さや『正信偈』の意味をどれだけ知っているか。全部自慢話です。ナンマンダブツの意味を『正信偈』で親鸞聖人はいつてくださつてゐるわけで、一声一声「ああ、そういうことか」といただいていえばいいのに、知っている私は偉いとなつたら、残念ながら念仏がなくなるのです。口からいっていせんが「俺は偉い」という話にすら替わっている。この私が教えにヨットてどういういのちを生きるのか。勝ったか、負けたか。得か、損か。有量の世界を生きるのか、きしていくのか。大きなわかれ道であります。

一人、例を挙げてお話ししてお

きたいのですが、五十代の時にだ

た。

たのですが、その内の一人、聞法仲間がありました。私はお寺に生まれた縁があつて仏教を勉強するようになりますが、その彼は十歳くらいの時に疑問を持ったというのです。どんな疑問かいうと、勉強していくても死んだら全部消えてしまうと。勉強するということに意味を感じられなくなつたと。それを大人たちに聞いたそうなのです。まず、母親に聞いてみると「あんた、そんな死なんて考えなさんな、縁起悪い」父親に聞いたら「お前、勉強したくないからそんなこというてんやろ。とにかく今は頑張って勉強せい」といわれ

すが、五十年代に亡くなる人が本当に多いです。二年前は後輩三人、皆五十二一とか三で亡くなつていっ

つまり、身近な親は答えてくれなかつた。後から親の気持ちもも

「水の浴にたる」をやっていることに意味を感じられなくなつた。そういう時、彼は一生懸命勉強しまして、国立の大学に行つたのですが、国立の大学というのは、いろんな新興宗教のサークルみたいなものがあつて、彼もいくつか入つたそうです。だいたいどのサークルも似たり寄つたりで、初めはアンケートからで「大学生活満足しますか」とか「趣味は何ですか」最後の方に「死後の世界に興味はありますか」と書いてあるのです。「ある」というと「おお、

「ちろんわかるといってましたが、いろんな人に聞いても誰も答えてくれない。「死ぬのになぜ生きているのか」という問いなのです。今積み上げたものが全部無くなつ

るは到達しないといふ教えたのだからです。でも彼は上り詰めて到達する途中で死んだらどうなるのだということを、どこでも尋ねるのですが、誰も答えてくれなかつたと。結局、宗教も世の中と大して変わらない。世の中であれば「良い大学に行け」とか「良い会社に行け」とかそういうことで上り詰めるわけでしょ。宗教の世界でも詰めたら救われるとか言う。その途中に命が終わったらどうするのだということを誰も答えてくれな

若いのに偉いね」といわれたそうです。聞いている人も若いのです。が、「とにかくうちのサークルにきて、一緒に勉強しない」といわれて、そういう新興宗教系のサークルに行つたそうです。でもほとんどが似たり寄つたり。つまり、頑張って磨き上げて、こういうとこ

てくださる教えであり「これた」と思ったそうです。でもこれは本当に大事なことで方向が全然違うのです。ほとんどの宗教がそうで上り詰めて価値があるというものを持手に入れよう。そういう心でしよう。でも親鸞聖人はそうではない。今ここに開けるのです。だから、皆お仲間で誰も上とか下とかという必要がない。もちろんそれだけが、それぞれの色で生きていくべきいいわけです。それぞれの花の輝きがあるのでからそこに届いてくださる教え。「ぜんぜん違ち

かつたと。  
これに對して親鸞聖人の教えは  
上り詰める教えではなかつた。阿  
弥陀さんが愚かな凡夫のところま  
できてくださる教え。こうなつた  
らたすかるとか、この問題をクリ  
アしたらたすかるのではなくて、  
今の私の現実のところに届いてき

ら「お前、勉強したくないからそんなこというてんやろ。とにかく今は頑張って勉強せい」といわれ

はアンケートからで「大学生活満足していますか」とか「趣味は何ですか」最後の方に「死後の世界に興味はありますか」と書いてあるのです。「ある」というと「おお、

詰めたら救われるとか言う。その途中に命が終わつたらどうするのだということを誰も答えてくれない。

けばいいわけです。それぞれの花の輝きがあるのでからそこに届いてくださる教え。「ぜんぜん違ちが

うた」といって。親鸞聖人の教えに本当に出遇ったのは四十代くらいいからです。それで亡くなる五十五歳までですが、十五年間は本当に聞き抜いておられました。晩年、私が話をするところに必ずおられるのです。京都、大阪、奈良の帰りに必ずいる。ある時は名古屋に来ておられたので「わざわざこんなところまで」といったら「いやいや、別に一樂さんだけちゃうし」といって。よく聞いてみると彼には夢があつた。聞法のために仕事をしてらっしゃる。普通は逆でしょ。仕事をして空き時間で聞法するというのに、彼は聞法のために仕事を選んでいる。「五十八歳くらいになつたら早期退職しようと思つとるんや」と。今までいろんな宗教の本を集めてきましたので、それで「人生のことで悩む人きたれ」という図書室の喫茶店を

開きたいといつていきました。山ほど本がありますから、それを並べて、何時間いようが、どれだけしゃべろうとオーケー。そんな喫茶店にしたい。早期退職しようといふ矢先に、五十五歳で逝つてしまつたのです。

その彼が親鸞聖人の教えに出遇えて本当に喜んでいたのです。五ヶ月くらいに検査入院するのでと言つていたのが、八月になつても聞法会に現れないものですから、ちょっと親鸞聖人の教えに出遇えたこと、これは本当に心の底から喜んでいました。まあ人に比べたら短いかもしらんけど、私は私の人生をもうこれで生ききらしてもらいますわ」と。もう病人の言葉とは思えないほど、たくましいお言葉をいただいて、こちらが何か問い合わせられたような気がしました。つまり「私は私としての人生を生ききります」ということなのです。まる

う病院に入つたら半分位しかなくて四十五キロになつてゐるというのです。「どうしたんですか、検査入院といつてましたね」といつた「いや実は検査したところ、臍に癌が見つかつてもう手術出来る状態じゃない」というのです。どんどんやつれていくのです。

「栄養を補給しているのですが、このとおりですわ」というのです。そして「夢は叶わないけれども、親鸞聖人の教えに出遇えたこと、これは本当に心の底から喜んでいました」というのです。なぜかといえば「元気な間は、あちこち聞法に行つてお念佛もして、自分は救われること間違ひなし」と思つていたらしいです。でもそれで行く

で彼から「一樂さん、大丈夫か」「あんた、ちゃんと生きとるか」とそういう励ましの言葉をいわれたように聞こえました。

ところが、その彼がもう一ついつてくれたのは「やはり自分の中に比べようとする根性が抜けない」ということ。これは「病氣になつて、あらためて知らせてもらいました」というのです。なぜかといえば「元気な間は、あちこち聞法に行つてお念佛もして、自分は救われること間違ひなし」と思つていたらしいです。でもそれで行く

と『仏説觀無量寿經』に「念佛できなにならば、たつた十遍の称名念佛でいい」と書いてあるのです。これ「念佛」「称名」という言葉を分けて書いてあるのです。念佛というのは、ある意味「心を落ち着けて仏のことを思い浮かべください」と読めるのです。でもそ

れができない。「苦しみやらいろんな悩みで苛まれている時には、たった十遍ナンマンダブツを称えるだけでいい」と書いてある。

それで彼がいったのは「結局、自分は十遍の念佛でたすかるといふことは聞いて知っていたけれども、それよりもどこかで、やはり勉強してとか、念佛でもたくさん称えてということが残っていたようだ。ところが「この体になつてみたらたつた十遍の念佛が簡単ではありません」と言うのです。「たつた十遍の念佛」といわれても声がまず続かない。「十遍の念佛が軽くなかったです」と、こんなことをいつてくれたです。だから初めて「十遍の念佛でもいい」というのがわかつた。

そうするとこれは十回という回数ではないのです。親鸞聖人が、はつきりいっておられます、たつ

た一度でいいのです。人が称えて

ためて感じているようでした。

おられる念佛を耳にするだけでい

だから「どこかで、これを軽ん

いのです。昔、枕経というのは亡

じていた自分がいるが、十遍の念佛もこの体になると、なかなか大きくなつてからしてたのではないで

す。もう命終だという時に皆が集

まつて、まわりでお念佛を称えて

送られたのです。本人は、もう声

を出す力もない。昔からいいます

ね。「目は見えなくなつとつても

耳は聞こえどるんや」といつて皆

でお念佛で送った。これは源信僧

都<sup>す</sup>の頃からですが「聞くだけの念佛」と。ここに自分で声を出せ

なくなつていても「ナンマンダブ

ツ」を聞きながらということがあ

る。声を出せる間は出し惜しみを

しない方がいいと思います。声が

いるだけでもよい。比べなくとも

いいのです。「私は私としてこの

一生を生きぬいて行きます」彼は

そこにはお内仏でお遇いするかもし

れませんが「ナンマンダブツ」の

ところに阿弥陀さんは、いらっしゃ

やるのです。そうじゃありません

か。畠仕事をしていても「ナンマンダブツ」のところで「ああ、そ

うやつたなあ」としみじみいただ

けることがあります。「ナンマン

ダブツ」をいただくところが阿弥

陀さんに遭遇う場所なのです。彼

は本当に「阿弥陀さんがきた」と

「ああそうですか、なら一緒にお

念佛しましようか」というと初め

てでしたが、彼の手を握って耳元

で十遍念佛称えさせてもらいました。四人部屋だったのであまり大き

きな声を出すと、あと三人の人

が驚くかもしれないと思って大き

な声を出しませんでしたが、耳元

で「ナンマンダブツ、ナンマンダ

ブツ」と十遍させてもらつた。す

ると彼が一言「阿弥陀さんが、今

ここにきてくれました」と。

ハッとしました。仏さんといつ

たら本堂へ行つてお遇いする。あ

とはないのです。病気が治つてから

とか退院してからという話ではな

いのです。そんなことでは間にあ

わないのです。「ナンマンダブツ」

と称えたそこに「私は私としての

命を生きぬいていきます」と。もう少し長くいたらとか喫茶店もしたかったなという思いはあります。しかし私は私の一生を生ききらせてもらいますという時に、比べて価値があるとかないとかそんなものはもういう必要のない世界。完全に一生を燃え尽くしていくよう、そんなお姿を見せてもらいました。だから本当に「大事やなあ」と思う。そういうことを病気で横たわっている彼から教えられました。お内仏に行ける間はお念佛をお参りしてください。行けなくなっても大丈夫です。「ナンマンダブツ」はベッドの上にまで届いてきます。「ナンマンダブツ」をいただくところが阿弥陀と出遇うところであります。そこにいろんな思いが湧いてくるが、それから解放されるということがあるので

私の父は、去年の十一月末に亡くなりました。半年ほどベッドで、最期は寝ている時間がほとんどでした。私が帰るのを待つてくれるのは嬉しいのですが、帰った瞬間に「次はいつくるんや、寂しい」といつてました。「いろんな仏法の話がなかなかできんし、お前が帰ってくるのが嬉しい」といわれて、帰るたびに布団を父のベッドの横に並べて仏法談義をしていました。お内仏に行ける間はお念佛をお参りしてください。行けなくなっても大丈夫です。「ナンマンダブツ」はベッドの上にまで届いてきます。「ナンマンダブツ」上で念佛は出んのか」といって、けしかけました。「念佛出んのか」といったら「それは出る」といいました。それで「念佛出たらどう

なりました。半年ほどベッドで、

が思い出されたり。  
それから私の祖母も七年ほど寝たきりだったので「ああ、ばあちゃんはこんな思いで天井を眺めとつたかもしらんなあ」とか、いろんな人に会える。「ベッドの上が、

にぎやかや」というのです。「ほんならおやじ、今ここで救われとなるようなもんやないか」といったら「当たり前やないか」というのでした。あまりにも「寂しい、寂しい」というものですから私はある時、試すようにいいました。「寂しい寂しい言うけども、ベッドの上で念佛は出んのか」といって、

けしかけました。「念佛出んのか」といつていた父に叱られました。「南無阿弥陀仏が出たらにぎやかな世界が広がる」だからといって「朝から晩まで、にぎやかだと

界が広がるぞ」といつてくれました。すでに亡くなつた人が出てきた。すでに亡くなつた人が出でたり、昔、聞いていた先生の言葉が思い出されたり。  
阿弥陀の世界に生きられたいろんな方々のお姿。これをいただけるのです。形で阿弥陀の世界、あるいは阿弥陀の世界に生きられたいろんな方々の姿。これをいただけるので、寂しい気持ちも湧いてきますが、それを縁にしながらまた「ナンマンダブツ」というところに私たちはこの広い広い世界をいたたくと云ふやうなもんやないか」といったら「当たり前やないか」というのでした。だからベッドの上にも開かれているのが「ナンマンダブツ」の救いなのです。お内仏に行かなければいけないという話ではなく、行ける間は行ってください。大きな声で称えられる間は声を出してお念佛をいただきましょう。でも出なくなつても大丈夫です。そういうことを先に亡くなつた方から教えられているのです。

[6/30]

## 「真宗合同布教大会」開催

会場 富山東別院会館

二〇一八年六月三十日、富山東別院会館を会場に富山県内外の若手僧侶が宗派を超えてリレー形式で法話を行う「真宗合同布教大会」が開催されました。本誌に三名の方から寄稿いただきました。

去る六月三十日に真宗合同布教

大会に参加しました。この大会は二〇一二年から浄土真宗の各派の本山・別院を会場として開催されてきたという経緯を持ち、若手僧侶が宗派を超えて集う布教大会で今回が第十回目ということでした。

以前から行われてきた法話研修会において、大谷派は機の深信、

本願寺派は法の深信を取り上げる法話のスタイルがあるということを聞いて、「私の法話はどうであろうか」という自らの法話の型を再考するきっかけとなりました。

その後の瓜生崇氏との話し込み法話での原稿をベースに本大会に臨

みました。今回初めての試みとして讃題から始まるスタイルの法話

で進めました。私のそれまでの法話のスタイルは自身の生活や経験ってきたという経緯を持ち、若手僧侶が宗派を超えて集う布教大会で今回が第十回目ということでした。

以前から行われてきた法話研修

会において、大谷派は機の深信、

本願寺派は法の深信を取り上げる法話のスタイルがあるということを聞いて、「私の法話はどうであろうか」という自らの法話の型を再考するきっかけとなりました。

その後の瓜生崇氏との話し込み法話での原稿をベースに本大会に臨

### 僧侶8人リレー法話

真宗大谷派富山別院

県内外の若手僧侶が宗派を超えてリレー形式で法話を行う「若手有志による真宗合同布教大会」が30日、富山市総曲輪2丁目の真宗大谷派富山別院（東別院）で開かれ、約120人が聞き入った。

人口が減少する中、従来型の法話にどうわざず新しいスタイルを模索しようと、20

12年から国内の浄土真宗各派の本山・別院で開き10回目。富山での開催は初めてで、京都と大阪、県内の8人の僧侶が20分ずつ講師を務めた。

本願寺派の野口智子さん（京都市）は「み仏の光に照らされて」と題し、親鸞聖人

の「ご和讃」と出合った経緯を紹介。「親鸞聖人の光に出合い、自分のごく慢さやさみしさに気付けた」と話した。座談会や仏教讃歌の音楽ライブもあった。北日本新聞社後援。



親鸞聖人の「ご和讃」との出合いを振り返る野口さん  
＝真宗大谷派富山別院

が聞き手の感覚をぐっと引き寄せる力を持つてくるというアドバイスもいただき、「一般論ではなくあなたの言葉で話しなさい」と迫つてくるものでした。

布教大会当日。私は組内の祠堂経法話に立っていたこともあります。前半の参加者の部を拝聴出来なかつたものの、仏教贊歌のライブといつたものもあり、多様なあり方を見せてくれたようでした。私が拝聴出来た方々の話し振りも様々で、色々な方々の話をもっと聞いてみたかったと思うものでした。

私の出番。厳密な時間の制約と動画の撮影という大会独特の普段とは異なる環境にやはり緊張感は高まるもので、実際のところ声の調子もぎこちなかつたと言わざるを得ませんでした。事前に原稿化しても、「あれ、普段は視線を何処に向けて話をしていたかな」とか「誰も頷いてくれる人が見えない、この話は伝わらなかつたかな」という感触があつても、それを短い時間で修正出来る力量が伴つて



### 第十三組 持專寺 大伴 慎介

「大一番には精神的な弱さを露呈してしまったなあ」と思う一方で、普段の法話の席ではどこか「慣れ」のような感覚で挑んでいたのかもしれないと思うものでした。自ら型を身につけようと思い挑んだ構成に違和感を覚えたという周囲からうの声も聞き、自らの形にしていくには時間が掛ることを再認識しました。

普段の一座一座の法話はもっと短い時間の時もあります。柔軟な考え方を求められながらも、仏法を伝えるという努力はより一層していかなければならぬ、そう感じじるご縁となりました。

「町の中心にあるお寺で何ができるのか」そんなある日寺の前にある郵便局のカウンターに「おやじバンドやってます」「そんなかわいい掲示があった。聞けば局長さんが仲間たちとバンドをやっているという。私は局長さんに一言「私も長年音楽やってるんです。お寺でライブしませんか?」こうしてすべてが始まった。実

は大川町には音楽に縁深い逸材が眠っていた。仲間が集まり大川町夕焼けライブ夏フェスが誕生。今五年目を迎えた。その実行部隊並びに、バンドを「大川町若者隊」と命名、その中の派生ユニットとして「ひのう姉妹」も産声をあげた。八月お盆明けの次の日曜日。弓波山西照寺。十五年前関西から入寺のため帰った私。その時にはすでに町にあつたお祭り、文化祭、コミニティが壊れていた。それでもこの町で生きていく覚悟を決めた私は、何かこの場所で出来ることはないか。何年か悶々としていた。

「寺院に僧侶に何を求めるですか?」この質問に明確に答えを持つている方が今の日本にどれぐらいいるだろうか? 娯楽があふれかえるこの現代社会に、衣を着る立場の私たちにできること、求められることは何なのか?

極論で言えば、残念ながら「何も求められていない」一生お念佛

小松市大川町。現代社会の抱える問題そのままの町。少子化・高齢化・過疎化。かつては商店が立ち並び、町で日常の買い物がすべて整う。そんな活気ある町であつた。そんな中に位置する寺院、弓波山西照寺。十五年前関西から入寺のため帰った私。その時にはすでに町にあつたお祭り、文化祭、コミニティが壊れていた。それでもこの町で生きていく覚悟を決めた私は、何かこの場所で出来ることはないか。何年か悶々としていた。

「寺院に僧侶に何を求めるですか?」この質問に明確に答えを持つている方が今の日本にどれぐらいいるだろうか? 娯楽があふれかえるこの現代社会に、衣を着る立場の私たちにできること、求められることは何なのか?

極論で言えば、残念ながら「何も求められていない」一生お念佛

に出会わなくとも、寺院に行かなくて生きていける世だから、宗教なんてわかんない、ダサい、怪しい、金がかかるものでしかない。それが現代における厳しい評価だ。

北陸は真宗王国といわれてきた。小松という土地は特にまだまだ信仰のあつい地であることは間違いない。自坊の御門徒にもこの方こそ念佛者である！ という方がまだおいでる。しかしながらそれは本当にレアなことで、厳しい現実があるのではないだろうか？

バンドで私はフロントでマイクを持つ。場や客層に応じて選曲し、覚えるために歌詞を一度じっくり読み込む作業をする。毎回「これって真宗だよな……これってお念佛だな……絶対お淨土の表現として最適だな……」そんな言葉に邦楽・洋楽問わず出会うのである。法話にあちこち行かせていただく中で、やはり自分でかみ碎いた言葉は説得力が増す。難しいお言葉も、たまに歌詞を引用しておはなしさせていただくが、場のみなさ

んの反応が違うことはいうまでもない。

音符に乗せるから響く言葉がある。音の中だからできる表現がある。

音楽が親鸞聖人の残されたお言

葉をさらに深く、しっかりと私たちの心に刻む働きをしてくれるのだ。漢字の羅列ではお伝えしがたいことも、自由に表現ができる。私たちが目指すのはわかりやすさだ。

ひのう姉妹はただの音楽ユニットではない。勝手ながら私たちはこのライブ法話を与えられた使命だと思っている。といってもまだ駆け出しのユニットではあるので、練習練習！ さらに研鑽を積んでいかなくてはならない。

今回法話大会に参加させていただいたのもご縁としか言いようがない。

演奏中、会場にハンカチで目頭を押さえる女性がおいでた。終了後、「歌詞をもう一度読みたいのですが、どうやつたら調べられま

すか？」そうお声がけいただいた。

繰り返しになるが、音符に乗せるからココロの琴線に触れる言葉がある。伝わるお言葉になる。お念

仏の教えがわかりやすく届くのである。

末法の濁世だからこそ！ でき

**真宗合同布教大会**



小松教区 西照寺 日野 史  
ひのう姉妹（音楽ユニット）

ることは沢山ある。思いつくことはすべてやってみる。ひのう姉妹の挑戦はまだ始まつたばかりである。

はすべてやってみる。ひのう姉妹の挑戦はまだ始まつたばかりである。

あるいは衆生ありて、五戒・八戒および具足戒を毀犯す。かくのごときの愚人、僧祇物を倫み、現前僧物を盜み、不淨に説法す。慚愧あることなし。もろもろの悪業をもつてして自ら莊嚴す。かくのごときの罪人、悪業をもつてのゆえに地獄に墮すべし。

『觀無量寿經』聖典 一一九頁)

○今宗教は、学問か実行か、どちらかであるといえば、勿論学問というよりも、実行といわねばなりません。特にその実行というのが、通常の実行は学問の進歩によりて、頗るその発達を見るところで

布施をいただき、説教をしている者においては、どのようにその身を取り繕つてみようとも、この批判を免れることはできない。むしろ、法話をすることにおいていよいよ明らかになるのは、悪業を離れることのないこの身であろう。一番の批判者は自分自身である。

宗教は学問とは違い、理屈に合  
うかどうかということではなく、  
信念を開発することにその主眼が  
ある。真宗門徒においていえば、  
「念佛もうす」ものとなることで

念の開発にあるが故に、その所説が学理に合うとも合わぬとも、少しも頓着しないのである。ただ信念開発のために、もっとも便利なるものを採用するのが、いわゆる善巧方便と申すことあります。

理屈が合うても合わぬでも、正当なる信念を開発することを得ば、説明の目的は達せられたとするのが、宗教の見地であります。故に世界の構成や、社会の組織などのことを宗教上に論述することがあります。その主要とする所は、信りても、その主要とする所は、信

経験に捉われて独りよがりになる  
ようでは、ただ虚しいだけになつ  
てしまふだろう。ここに、感話、  
研究発表、そして法話の違いがあ  
るのではなかろうか。ただし、  
このことは話者の主觀の問題であ  
る。

坊主として 法話をする者として、どこまでも聞き手であり教えを乞う者であるということがあるのだろう。法話をすることとは、話者自身が仏の教えの前に身を晒すことに他ならない。



あります。しかし、宗教においては、それが全く無関係であるというてよいようなことがあります。

（信念開発）があつたとしても、絵に描いた餅である。反対に実行が、そこに実行がなければ、どのような法話をしたとしてもそれはあらう。もちろん、学問は大切だ

研修会報告①

【7／30～8／1】

## 一〇一八年度「児童研修大会」を終えて

会場 黒部市ふれあい交流館「あこやーの」



今回で五十八回目を迎える児童研修大会は、黒部市ふれあい交流館「あこやーの」で七月三十日（月）～八月一日（水）の二泊三日で開催いたしました。一二三名の参加者とスタッフとして参加した四名の中学生、それと寺族スタッフ

期間中は、阿弥陀様が生活の中心になるよう心がけ、朝・夕のお勤めや法話を聞くことで子供たちにも身近な存在であるということを学んでもらい、共同生活を通じて人への優しさや協調性などを培ってもらいました。今回は気温が高く体調管理をするのがとても大変でしたが、子供たちの「あそぶ力」は凄いとあらためて実感いたしました。レクリエーションでは四班に分かれて班ごとに協力してゲームを進め、発想力豊かに紙ひこうきやフリスビーを作製していました。



今回の児童研修大会でも、それた。野外活動では流しそうめんやカレー作り・花火など、友だちと一緒に使う楽しさも経験してもらいました。

ぞれいろんな出会いがあつたと思います。その出会いを大切にこれから自分の生涯に活かせてもらえば幸いかと思います。

第十二組 善念寺 岩田 一定

研修会報告②

[11/27~28]

## 真宗本廟報恩講団体参拝に参加して

このたび、ご縁があり団体で真宗本廟報恩講にお参りしました。

個人で何度もお参りしましたが、

今回のお参り、お斎（食事）は今まで感じたことがない、体にしみわたる何ともいえない気持ちになりました。団体という達成感につつまれました。

また、その都度、その時で別院の鷲尾様や常念寺の松田様にいろいろとおたずねして本当にわかりやすく教えていただきました。なお、住蓮山安樂寺へは特別な気持ちでお参りしたいと思っていました。超美人一人が天皇を振ったことによって親鸞様の人生、時代を変えた。現代にも通ずるものがあると感心しました。親鸞様は越前から越後、東北、関東一円に他力本願を広められました。何が縁と

なるか？と思いつつ、私の孫が身体障害者で生まれ……何で？

何で？縁とは？仏教とは？四年

百年も続いた津林家もこれでなくなるとか思えば思うほど自己中心的になってくる。気が狂うほど考えましたが……。近頃やっと仏の教えとか、すべてのことに相手を

思う気心に心が少しづつ穏やかになってきたような気がする時もあるが、なかなかそうはいかなくて困っています。とにかく生かされている間は少しでも皆様のお話を聞いて反省しながらと思う今日このごろです。

第九組 中堂寺 津林 洪



十一月二十七日から二十八日の教区門徒研修小委員会主催の富山教区報恩講団体参拝に参加しました。今年は参加申し込みが十四名と少なく、門徒十二名、寺院関係では引率の鷲尾駐在教導と私の二名でした。

初日は恒例となっている移動中のバス中でのミニ法話で、普段の法話というより、お斎のことや大寝殿の障壁画の秘話など報恩講に結び付けて話題提供をさせてもらいました。

市内観光は、哲学の道を散策しながら、紅葉が色鮮やかな中、非業の死をとげた住蓮と安樂を祀った安樂寺と法然院、銀閣寺を巡りました。

二日目は六時にホテルを出て、晨朝参拝に向かいましたが、すでに御影堂中央付近はだいぶ埋まっていました。結願日中での坂東曲がお目当てとあって十時頃にはほぼ満堂になり、入院加療を終えられた大谷暢顯門首も出仕され元氣

なお姿を拝見できました。壮大に莊厳された御真影前の仏花を間近で鑑賞し、坂東曲の念佛・和讃を声明本で追いながら、今年も報恩講に出遇えたことに感謝しながら十分雰囲気を体感してきました。

今回の研修内容としては、天候にも恵まれて、見学場所も吟味され十分な時間がとれたこと、これまで私個人での参拝でしたので、他の門徒さんとの交流がもて貴重な体験となりました。課題としては、いかに参加人数を増やしていくかの工夫、門徒さんへの呼びかけが必要と感じました。

第十一組 常念寺 松田 雅秋



## 教区だより

(敬称略)

### 得度式受式

### 住職任命

(一〇一八年七月一日～十二月三十一日)

(一〇一八年七月一日～十二月三十一日)

二〇一八年七月七日

第九組 圓龍寺 圓山 智亮



二〇一八年七月二十八日

第十一組 淨信寺 柴田 龍一

## 転任のご挨拶

大谷祖廟事務所主事 松尾 淳

二〇一八年八月一日付



で、大谷祖廟事務所へ異動となり、早くも半年が経とうとしております。大谷祖廟では日々参拝者をお迎えし、ご案内をしております。改めて大切な場所であることを痛感しております。富山教区の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。御身大切にされますよう念じております。

富山教務所在任中は、初めての教務所勤務ということでお不安ばかりであります。富山教区の皆様の温かいご指導により、五年間を過ごすことができました。自坊が金沢教区ということもあり、平日は富山に週末は金沢へ帰るという生活を続けておりました。日曜日の夜に金沢から富山へ車で戻る時景は今でも脳裏に残っております。

今回『如大地』の原稿を依頼され、いざ書こうとするとなかなか書けず、これまでお願いばかりしていましたが、快く受けいただいた方々には頭が下がる思いであります。また『如大地』編集委員の皆様には、法務等忙しい中、月一回の編集会議に出席いただけ、より良いものを作ろうと一緒に話

し合えた事が本当に懐かしくとても有意義な時間でありました。今後も教区のニーズに合った『如大地』を作り続けていただきたいと思います。

最後に本山へご参拝の折には、ぜひ大谷祖廟へもお立ち寄りください。お待ちしております。五年間まことにお世話をありがとうございました。今後とも何卒よろしくお願ひいたします。

合掌

## 新任のご挨拶

富山教務所主事 三輪清文



八月一日付にて富山教務所主事を拝命いたし、二十数年ぶりにお世話になっております。久しぶりに訪れた御地は、別院境内もきれいに整備され、街並みも変っていました。また、教務所・別院では、日々、研修会や自主学習会など教化活動が精力的に行なわれています。なつかしい反面、時のうつろいをひしひしと感じている次第であります。

再び御地で学ばせていただく縁を大切に、初心に立ち返り宗務に精励いたします所存であります。より一層の御指導・御鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

○前任地 三重教務所  
○出身 大垣教区

# 教化日誌

(一〇一八年七月一日～十二月三十一日)

(7月)		2日 ハンセン病問題全国交流集会準備会	26日 教区門徒会（通常会）	2日 報恩講リハーサル
(8月)		3日 准堂衆会総会	27日 教区同朋の会総会	3日 境内清掃
(9月)		4日 第五十八回児童研修大会	29日 富山別院暁天講座（～31日）	3日 仏具磨き／帰敬式役係会・準備
(10月)		5日 教区同朋の会役員会	30日 第十組組会 【上田泰子氏】	4日 報恩講立華
(11月)		6日 青少幼年教化小委員会	5日 第十二組組門徒会	5日 ハンセン病問題全国交流集会準備会
(12月)		7日 『如大地』編集委員会	6日 富山別院報恩講（～8日）	6日 富山別院報恩講事前準備
(1月)		8日 富山別院教化委員会企画会	7日 北陸連区ソフトボーラー大会	7日 ハンセン病問題全国交流集会準備会
(2月)		9日 坊守会役員全体会	8日 儀式作法講習会	8日 社会教化小委員会
(3月)		10日 声明作法講座	9日 教区会参事会	9日 ご命日のつどい【渕上知明氏】
(4月)		11日 組織拡充小委員会	10日 北陸連区坊守研修会（～12日）	10日 ハンセン病問題全国交流集会準備会
(5月)		12日 割当審議委員会	11日 イタイイタイ病資料館研修	11日 仏具磨き／帰敬式役係会・準備
(6月)		13日 教化委員会総会	12日 ハンセン病問題全国交流集会準備会	12日 ご命日のつどい【渕上知明氏】
(7月)		14日 ご命日のつどい【赤田見心氏】	13日 地方協議会（教区・組改編）	13日 共学研修会
(8月)		15日 児童研修大会スタッフ会	14日 『如大地』編集委員会	14日 ハンセン病問題全国交流集会準備会
(9月)		16日 教区会参事会・教区門徒会常任委員会	15日 ご命日のつどい【星川了氏】	15日 ご命日のつどい【辻明浩氏】
(10月)		17日 あいあう会	16日 内局巡回	16日 教区同朋の会報恩講
(11月)		18日 解放運動推進協議会	17日 門徒研修小委員会	17日 ハンセン病問題全国交流集会準備会
(12月)		19日 ハンセン病問題全国交流集会準備会	18日 『如大地』編集委員会	18日 教区同朋の会報恩講
(1月)		20日 第十一組組会 【一樂真氏】	19日 ご命日のつどい【星川了氏】	19日 ハンセン病問題全国交流集会準備会
(2月)		21日 大谷大学同窓会公開講座	20日 『如大地』編集委員会	20日 教区同朋の会報恩講
(3月)		22日 ハンセン病問題全国交流集会準備会	21日 あいあう会	21日 共学研修会
(4月)		23日 教区坊守会聞法講座	22日 富山別院彼岸会（～24日）	22日 ハンセン病問題全国交流集会準備会
(5月)		24日 共学研修会	23日 解放運動推進協議会	23日 真宗本廟報恩講富山教区団体参拝
(6月)		25日 教区会（通常会）	24日 相続講員物故者追弔法要兼彼岸会 （富山小会主催）	24日 あいあう会
(7月)		26日 ハンセン病問題全国交流集会準備会	25日 富山別院宗祖親鸞聖人御正忌法要 （～28日）	25日 あいあう会
(8月)		27日 第十一組組門徒会	26日 「おまさん」（～28日）	26日 あいあう会
(9月)		28日 第九組組会	27日 【竹部俊恵氏】	27日 あいあう会
(10月)		29日 第九組組会 （寺院活性化支援室説明会）	28日 30日 人権問題 映画『獄友』上映会	28日 あいあう会
(11月)		30日 第十二組組会	29日 新宗教問題研修会	29日 あいあう会
(12月)		31日 第九組組門徒会	30日 【四衢亮氏】	30日 あいあう会
(1月)		(29日)		

第十三組	持専寺	前坊守	大伴	耐氏
第十三組	光榮寺	前坊守	井口啓子氏	八月二十七日寂
第十一組	西光寺	前坊守	神田三枝氏	九月七日寂
第十三組	前坊守	大伴	十一月十二日寂	

## 敬弔

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

(一〇一八年七月一日～十二月三十一日)

### 『住職』

第十二組	心行寺	住職	名越	誓氏
第十一組	圓寶寺	住職	松原	秀了氏

### 『坊守』

第十三組	光榮寺	前坊守	井口啓子氏	八月二十七日寂
第十一組	西光寺	前坊守	神田三枝氏	九月七日寂
第十三組	持専寺	前坊守	大伴	十一月十二日寂

- 5日 『如大地』編集委員会
- 6日 青少年幼年教化小委員会
- 教区改編委員会
- 7日 教区会参事会・教区門徒会常任委員会合同会
- 8日 子ども報恩講
- 11日 教区坊守会声明講習
- 12日 組織拡充小委員会
- 14日 真宗仏事研修会【近松 誉氏】
- 15日 ご命日のつどい【鰐川 達氏】
- 17日 教区同朋総会【酒井義一氏】
- 18日 門徒研修小委員会
- 19日 富山別院教化委員会
- 『如大地』編集委員会

『真城義麿氏、えしんりょう氏』

『眞城義麿氏、えしんりょう氏』

『眞城義麿氏、えしんりょう氏』

『眞城義麿氏、えしんりょう氏』

## 編集後記

『如大地』第144号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力を願います。

昨年暑い夏、子どもの学校関係で一泊二日の薬師岳登山に参加した。中学生四十六名、大人十三名の大所帯でのチャレンジ。私自身登山に興味はなく、これまでの登山と言えば、立山雄山に一回登っただけ。薬師岳は初挑戦、薬師岳アタックに際し、周りからいろいろと山に関する教示を受けた。膝を痛めないためタイツを履いた方がいい。最初から飛ばさず、ゆっくりでいいからマイペースで。休憩は長くとらず水分補給程度で等々。無事登頂し下山を果たすため、周りに迷惑をかけたくないため素直に聞いた。初日、登山口「折立」を朝十時に出発。天候に恵まれ青空の下、太郎平小屋へ向かう。途中、中学生女子一名が頭痛を訴えてきた。大人の中に看護師さんがいるので診てもらい、高山病にかかる可能性では途上で戻らなければならないのではと思った。しかし、そこは百戦錬磨の看護師さん、その子を言葉巧みに勇気づけ少しづつ歩き始めた。

初日は全員太郎平小屋に到着一泊した。太郎平小屋からは、薬師岳はじめ富山市で一番高い水晶岳など靈峰に圧倒された。翌日に頂上を目指した。大自然の中、富山湾、富山平野、有峰湖が眼下にある。登頂から下山まで何人か体調不良になつたメンバーがいたが、全員が無事全行程を闊歩した。現世で生かされている我々にとり、山、谷、海、平野がある。一人では克服できない難所でも周りの力で超克できることがある。これからも人ととの出会いや繋がりを大切にしていきたい。

# お寺と紅葉 …… 京都・奈良



① … 下鴨神社 ②⑦⑭ … 清涼寺 ③⑥ … 酬恩庵一休寺 ④⑬ … 圓成寺 ⑤ … 南禪寺 ⑧ … 西曆寺  
⑨ … 淨瑠璃寺 ⑩ … 伝香寺 ⑪ … 喜光寺 ⑫ … 仁和寺